成田のある一日

まちの風景に外国の人が溶け込んでいました。

PM1:00
駅改札

AM6:00
成田山新勝寺

PM0:00
ラーメン店

AM8:00
保育園

AM11:00
新勝寺境内

AM10:00
ホテルロビー

international city
A Day in NARITA

新たな国際化の時代を迎えた成田

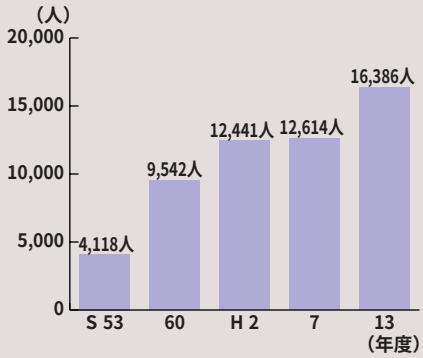
ことし4月、新滑走路がオープンした成田空港。日本人利用客が著しく増加する一方、外国人利用客も1日当たり16,000人と、開港当時に比べて４倍にも達しています。それに伴い市内に観光や仕事などで訪れる外国人の数も増えています。

さらに開港から25年を迎え、成田に住む外国人も増えてきました。観光客だけではなく、普段の生活の中にも、外国人が溶け込んだ国際都市へと成田は姿を変えてきています。

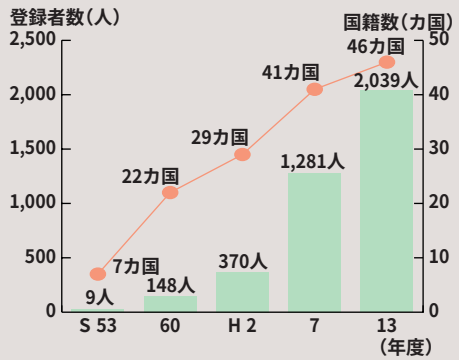
開港以来、成田にはさまざまな形の国際交流が生まれ、多くの人たちによって育てられてきました。このような国際交流の多くは、市民ボランティアの人たちによって支えられています。きょうも市内では観光案内やホームステイなどさまざまなボランティア活動が行われていることでしょう。

新たな国際化の時代を迎えた今、成田が真の国際都市になるために、わたしたち市民は何をすべきか。身近な草の根国際交流の中から探ってみることにしました。

成田空港外国人旅客数（1日当たり）



空港開港後の外国人登録者数



PM2:00
成田空港
第2旅客ターミナル

PM3:00
民芸品店

PM7:00
日本語教室

PM8:00
パブ

PM11:00
成田空港

HELLO

“ハロー”の一声で交流の扉は開きます

「英語を生かしてわがまちに何か貢献したい。前々からそう考えていたんです。それで、定年まで2年残っていたんですが昭和55年3月に教職を辞めましてね、すぐに駅前の観光案内所にお世話になりました。それがわたしの国際交流ボランティア活動の始まりですね」

笑いじわが刻まれた穏やかな笑顔で野々宮功さん（土屋）は語り始めました。

野々宮さんといえば、成田の国際交流ボランティアの草分け的存在。約11年間にわたり観光案内所の顔として、外国人と交流を重ねてきました。一時体調を崩し観光案内所は退きましたが、成田国際フレンドシップクラブ、成田市国際交流協会などの会員としてボランティア活動は続けています。野々宮さんに、自身の活動を通して『国際都市・成田』について伺いました。

ホームステイした子の親代わりも

「観光案内所は、お給料はいただいていましたが、ほとんどボランティアみたいなものでしたね。成田を訪れた観光客に観光施設などを紹介するのが本来の業務ですが、いろいろな外国人が訪ねてきました」と言いながら、30冊ものアルバムを取り出す野々宮さん。

「観光案内所で知り合った外国人が、わが家に遊びにきたり、ホームステイしたこともよくありました。中には3カ月半もホームステイした親子もいましたよ。アメリカの航空会社に勤務する女性とその子ども（3歳）でしたが、彼女がホームステイして日本語を学びたいというんですよ。家族に無断でOKしちゃったんですが、妻や娘には迷惑を掛けました。彼女がフライトで日本を離れている間は、子どもの親代わりを務めなければなりませんでしたから」

彼女たちの写真を手にとった野々宮さんは、懐かしそうに目を細めました。

ホームステイ最長記録のクレアさん（左）とユウキくん（中央）と一緒に

百歳になっても続けますよ

「成田を訪れる外国人も、成田で暮らす外国人もずいぶん増えましたね。町中を歩くと、どの時間帯でもよく外国人とすれ違います。そんなときわたしは笑顔で“ハロー”と声を掛けるんですよ。そうすると“ハロー”と笑顔を返してくれます。市民のみなさんも外国人だからと物おじせずに“ハロー”と一声掛けてみたらどうでしょう。それだけで交流の扉は開くと思いますよ」

と語る野々宮さん。百歳になってもボランティア活動を続けていくという野々宮さんに、その元気のもとを尋ねると、

「国際交流ボランティアは、わたしの生きがいですから」

といつもの笑顔が返ってきました。

6冊のゲストブック。105カ国1万人を超えるサインが交流の歴史を物語る

「Welcome to naritasan sinshoji temple.（ようこそ成田山新勝寺へ。）」と、成田山の文字を染め抜いた法被を着て、英語で外国人に成田山を案内する斉藤優雄さん（加良部）。

成田市老人クラブ連合会が平成11年に発足させた、シルバーボランティアガイドの英語分科部会のリーダーです。

斉藤さんは、3年前、北海道千歳市から成田に引っ越してきました。千歳時代は、冬季札幌オリンピックのアルペン競技役員兼通訳として活躍し、市内の「サケのふるさと館」では、英語案内のボランティアや社会教育委員として地域の生涯学習に力を注いできたそうです。

喜んで感謝してくれる人がいるから続けられます

成田で人生をもう一度

「これまでの経験を、成田のまちづくりに生かせないかと考えていたんですよ。そこにシルバーボランティアの話がありましてね、これまで英語を生業としてきた人生をもう一度成田でできる、自分の英語の力を試せるチャンスと、心から喜びましたよ。成田は、国際空港と成田山に象徴される千年以上もの歴史をもつ仏都。そのコントラストが好きで、ここを訪れる外国人に日本文化の一端を伝えることができたらどんなに楽しいことかと前から考えていましたから」とシルバーボランティアガイドになったきっかけを話してくれました。

現在、成田山での英語ガイドは、月に2～4回。その仕事が最近、いろいろな外国人に知られるようになったそうです。

「ことしの4月、わたしたちシルバーボランティアガイドの存在を聞きつけて、日本語と日本文化を学ぶ短期留学生がアメリカから訪れました。成田市は新旧両面の日本文化をもつまちで、オリエンテーションには最適だというわけです。日本の文化や社会などの学習への先導役を果たしてくれたボランティアと、成田市民の心温まる歓迎に元気付けられたと礼状をいただきましてね。5月と6月にも留学生を案内してほしいというんですよ。

3回のオリエンテーションが終わると、来年もぜひ成田へ行きたい、成田山だけではなく、もっと地元の学生とも交流したいと再度手紙をいただきました。ガイドをやっていて本当によかったと思いましたね」とうれしそうに語る斉藤さん。

この法被を着てご案内します

英語ガイドが交流の起点に

「最近、成田山の英語ガイドが発信起点となって、外国と成田がつながって、海を越えた市民レベルの交流が広がってきたと強く感じますね」と自分たちの活動の予想以上の成果に驚きを隠せない様子です。「英語ガイドは、わたしのライフワークです」とさわやかに言う斉藤さんは、「観光英語ガイドグループの先駆けとして、これからも仲間とともに一生懸命研鑽を積んでいきたいと思います」と目を輝かせました。

WELCOME

今、市民レベルの交流に広がりを感じます

言葉の壁は無かったですね

「また受け入れたい」と語る
遠藤眞義さん・澄江さん夫妻（下福田）

「ことし3月に娘（麻寿美さん）がサンブルーノ市（アメリカ）の家庭にホームステイでお世話になったので、今度はうちの番だと思いましてね」と受け入れの動機を語る眞義（まさよし）さん。妻の澄江さんは、「カタコトの英語で話してみると二人とも素直で明るくて、とてもいい子たちでした。おばあちゃんが日本語で話し掛けても、身振り手振りやその場の雰囲気で結構通じましたよ」と振り返ります。

「彼女たちがパスタ料理を作ってくれたんですが、材料からガラスの食器まで持ってきましてね。トランクの半分はその荷物だったんですよ。食器はお土産代わりでしたが、むこうの家庭の気遣いには驚きましたね」と眞義さんが言うと、「とにかく何かやってあげなくちゃと考えましたが、今思うともっとゆっくり日本を体験させてあげればよかったかなと思いますね」と澄江さん。

「言葉が通じなくても、心は通じるものだなと思いました。おばあちゃんの作った赤飯を食べて”おいしい“と言ったとき、”また来るよ“と言って別れたときの顔は忘れられませんね。初めての経験で戸惑いもありましたが、また機会があればと思います」眞義さんの言葉に、澄江さんもうなづきました。

―外国を受け入れる

―日本を体験する

遠藤さん宅にホームステイしたのは、キャサリンさんとイザベルさん。ホームステイの感想を尋ねると、二人ともうれしそうな笑顔で、「It was fun!!（楽しかった）」と答えてくれました。

「日本の伝統的な家は、アメリカのカントリーハウスみたい。かわいいし、リラックスできて、とてもきれい。お布団も快適に眠れました。”タタミマット“にはちょっと驚いたけど…」とイザベルさん。

キャサリンさんは、「おじいちゃんとおばあちゃんがとても親切だったの。家に着いたとき荷物を運んでくれたし、わたしたちがパスタ料理を作って麻寿美ちゃんたちにごちそうした後、お皿洗いを手伝ってくれたの」

さらに、「特におばあちゃんは、かわいい子たちだ、いい子たちだと、本当の孫のようにかわいがってくれて、帰るのが嫌になっちゃった。今度はおばあちゃんがサンブルーノに来てくれるといいな」と別れがつらい様子。

It was fun!!

習字や茶道の体験、七夕の短冊作りなど日本文化を楽しんだ二人は、もう少し遠藤一家との楽しい思い出を作りたかったように見えました。

イザベルさん

キャサリンさん

日本語だけで指導します

石原麻里さん

「それではこれから授業を始めます」公民館の教室に集まった外国人を前に、石原麻里さん（新駒井野）が日本語で話し掛けます。ここは、子どもから大人まで、国籍も言葉も違ういろいろな国の人が集まる『外国人のための日本語教室』。

「大学で日本語指導を勉強したので、国際交流協会に入会し、日本語指導ボランティアに登録しました。もう4年になりますね」とこの教室の講師になったきっかけを話す石原さん。

「この教室では、あくまでも、生活する上で日常使う程度の日本語を教えています」と語る石原さんに、日本語指導のポイントを伺うと、「大事なのは授業中に外国語を使わないこと、日本語だけで指導することですね。英語で説明してしまうと、日本語も英語も分からない受講生にとっては不公平ですよね。その人たちだけが分からないまま次へは進めません。だから日本語しか使わないんです。絵を書いたカードを見せながら、身振り手振りを合わせ、ゆっくり話せばなんとか理解してもらえます」と明快な答えが返ってきました。でも、日本語のあいまいな部分を教えるのはとても難しいとのこと。

「仕事をしながらなので大変なこともありますが、一生懸命勉強して日本語が話せるようになった受講生を見ていると、講師をしていて良かったと思います」と優しい笑顔で話してくれました。

―日本語を教える

「ニホンゴムズカシイ」

日本で生活する―

この日、日本語教室に来ていた遠藤亮くん（遠山中3年）は、ことしの4月、中国から成田に引っ越してきました。「初めて覚えた日本語は？」の問いに、しばらく考えてから、「ニホンゴムズカシイ」と笑いながら答える遠藤くん。中学校の授業はもちろん日本語です。

初めのうちは、先生が何を言っているのか全く分からなかったそうですが、この教室に通い、少しずつですが日本語を理解しているようです。「友達もたくさんできた」と話してくれました。

メキシコから来た小向（こむかい）さんは、夫婦で受講しています。今、一番楽しいのは日本語を覚えることで、毎日少しずつ勉強しているそうです。「成田で好きな場所は、成田山と三里塚公園。桜がとてもきれいです」と、ゆっくり自分の言葉で話してくれました。

ここに来ている生徒たちは、文化も習慣も違う日本で生活するために、とても前向きに日本語に取り組み、なんとか日本語で伝えようとがんばっていました。日本語が相手に伝わったときの生徒たちの笑顔がとても印象的でした。

小向ミゲルさん・ロサルバさん夫妻

遠藤亮くん

※日本語教室についてのお問い合わせは中央公民館（☎27－5911）へ。

草の根国際交流を目指しています

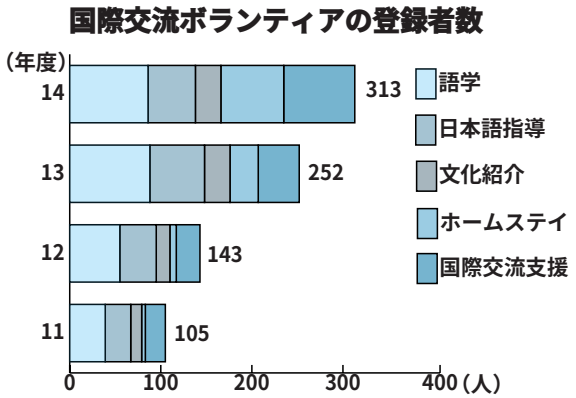
市民レベルの国際交流を盛り上げようと、成田ではボランティアを中心としたネットワークづくりが進められています。

手をつなぐ国際交流ボランティア

国際交流ボランティアといっても、そのかかわり方はさまざまです。得意の語学を生かして成田を案内する人もいれば、ホストファミリーとなる人もいます。ほかにも、成田に住む外国人に日本語を教える人、日本の文化を紹介する人、外国人の相談を受けるなど生活面を支援する人たちもいます。

こうしたボランティアの人たちの力を、もっと有効に使うことで草の根国際交流の輪を広げようと、平成11年度から成田市国際交流協会によるネットワークづくりが進められています。

協会には語学をはじめとして、日本語指導・文化紹介・ホームステイ・国際交流支援の5部門に、9月末現在313人のボランティアが登録し、各分野で活発に活動しています。



あなたも参加してみませんか

成田ではいたるところに国際交流の機会があります。町中で外国人に道を教えることも一つの交流です。語学が苦手という人でも、身振り手振りで思いは通じます。そんな小さなところから、国際交流が始まることもたくさんあります。

成田には、国際交流ボランティアとして活躍している人がたくさんいます。あなたが国際交流を始めようとすれば、きっと応援してくれるはずです。あなたもこの輪に入り、いろいろな国の人たちと交流を深めてみてはいかがですか。

くわしくは成田市国際交流協会事務局（☎23-3231）へお問い合わせください。

ミス・スペインを出迎える国際交流協会ボランティア

成田とチリで新たな交流

道案内からはじまる　国際交流のかたち

ことしの9月、東小学校に南米チリから一人の女性が訪ねてきました。彼女の名前はラウラ・エルナンデスさん。チリの山間部にある、児童が9人という小さなアロヨエルガト小学校の校長先生です。

この訪問の立て役者は、5年前にチリを訪れた斉藤年一さん（空港勤務）です。彼の乗ったバスの隣に座ったのがラウラさん。そこで、斉藤さんがラウラさんに道を尋ねたのが今回のきっかけとなりました。その後、日本を訪ねてきたラウラさんを案内した先は、成田山新勝寺。その時開催されていた「国際こども絵画交流展」を見て感激したラウラさんは、すぐにチリの子どもたちの絵を出展することを決めました。二人の交流が学校同士の交流へと広がったのです。道案内という種から育てた斉藤さんとラウラさんの「国際交流の芽」。それは今、子どもたちによって、たくさんの花を咲かせようとしています。

平柳校長に国旗を手渡すラウラさんと、その様子をビデオに納める斉藤さん

市民がつくる国際都市

各国のグループが音楽や踊りを披露

会場にはいろいろな国の店が

将来の国際都市・成田を予感させるイベントが、9月29日に国際文化会館で開催されました。ことしで2回目となるそのイベントは「成田市国際市民フェスティバル」。そこには小さいながらも、わたしたちが目指す「国際都市」の姿がありました。

日本人と外国人が一緒になって

成田に住む日本人と外国人との交流をもっと深めようと始められた「成田市国際市民フェスティバル」。会場は、市内に暮らすさまざまな国の人たちの顔であふれています。ここでは、日本人も外国人も成田に暮らす一市民なのです。

それぞれの国のグループが、お国自慢の音楽や踊りを披露すると、いろいろな国の人で埋まった客席から温かい拍手が送られます。ラテン音楽が演奏されれば、見ている人だけでなく、模擬店で料理を作っている人も踊り出します。その顔からは、誰もがこの雰囲気を楽しんでいることが伝わってきます。

食べることも国際交流のひとつ

会場では、市内に住む外国人が作る世界の料理も味わうことができます。その国独自の味付けがされた料理は、日本人好みに作られた外国料理とは違い、どれも本場の味。その独特の味覚にやや戸惑う人もいましたが、お互いの国の食文化を理解することもとても重要な国際交流の一つです。

将来の成田は、世界の食文化を体験できる国際都市となっているかも知れません。また、これらが融合し成田発の国際的料理が生まれる可能性もあります。それを作り出すのも会場にいる各国の「成田市民」です。

「スリランカノコロッケハイカガデスカ」

「日本一の国際都市」はわたしたちの手で

成田で暮らす日本人の市民と外国人の市民、すべての人が「住みよい」と感じるまち。そんなまちなら当然訪れる外国人にとっても快適なはずです。

今、国際都市といわれている国内のほかの都市が、長い年月の末に真の国際都市になったことを考えると、成田はこれからです。

国際空港という、国際都市づくりには格好の条件をもつ成田。しかし、今回のボランティアの活躍を見ても分かるとおり、その基礎を作るのは市民レベルの草の根国際交流です。

そして、国籍にとらわれることのない、わたしたち市民一人ひとりがつくるまちこそ、「これからも住み続けたい日本一の国際都市」といえるのではないでしょうか。

近所付き合いが国際都市への近道

地域の外国人にお母さんと慕われる
村山オラタイさん（郷部・タイ出身）

成田に来て11年。最初は好奇の目でタイのことについて聞かれることもありましたが、最近は聞かれることがうれしいくらいです。今住んでいるところは、隣近所みんな仲が良くいろいろな面で親切にしてくれます。タイでも近所付き合いはとても大事です。わたしたち外国人にとって、住民同士の付き合いが活発なところほど実は住みよいまちなのです。主人は、成田も以前のような町や村の付き合いが薄れてきたと言っています。昔のような人と人との触れ合いを取り戻すことが案外国際都市への近道かも知れませんね。